

トクシクメロフ

こねくり回して書いた本なんて理屈ばかりで大した事ないに決まってる。と思ってなんにも考えずに書いたって途中で破たんするに決まってる。と思ったから書けないでいたら締め切りが過ぎたので結局なんにも考えずに書かざるを得なくなったのがこれです。そしたら会心の出来になったので、それ以降の本は毎回ギリギリになるまで書かないでいたら劇団員に怒られるは胃腸は壊すは散々な目に遭ったのでした。もう『トラックメロウ』の事は忘れます。

～東京・長久手公演パンフレットから～

登場人物 男1／添乗員

男2／バスの運転手

客1／ポロシャツのおじさん

客2／メガネを掛けた背広姿の細長い男

客3／大学生くらいの青年

客4／ぼつちやり体型の主婦

客5／見中学生男子のように見える女

女／トラックの運転手

駐車場

添乗員の男が、小旗を持ってやってきた。

男1 はい、こちらです。

続いてツアー客が5人。

男1 : えー、皆さんはこれから、岐阜県は飛騨高山に向かいます。えー、飛騨の里には、えー、飛騨の匠と呼ばれる、えー、職人の方がおられます。えー、今回皆さんは、その、飛騨の匠からですね、えー、木彫りの熊とか、犬とか、小鳥とか、えーいろんな動物の作り方を教えて貰う訳であります。それでは！…出発まで今しばらくお待ちください。

ツアー客達、無反応。

男1 えー、今回のツアーの案内をさせていただきます、小久保です。よろしく願います。えー、ちょっと運転手さん

最後尾に、運転手が立っている。

男2 はい。

男1 自己紹介を。

男2 あ、はい。運転手の、甲山です。よろしく願います。

ツアー客 無反応

しばらくそのまま

男1 えー、お相撲さんみたいな名前ですが、けつしてそうでない事は体格を見て貰えば分ると思います。よろしくお願いします。それでは…出発まで今しばらくお待ち下さいませ。

男1 運転手さん？

男2 はい。

男1 ちよつと。

男2 なんですか？

男1 いや、ちよつと。

男2 はい。

男1 こつちに。

男2 なんですか？

男1 ちよつとこつちに。

男2 ここでも聞こえますけど。

男1 うん、でもこんな所で話してもアレですから、こつちに。

男2 だつてそつち行つたら私、怒られますよね。

男1 うん、怒られるか怒られないかは、あなた次第ですから。

男2 だつても怒つてるじゃないですか。

男1 うん、だからそれはね、あなたがこつちに来ないからですよ。

男2 どうせ怒られるならこつちでイイです。

男1 うん、この距離だとどうしても声を張らないといけないじゃないですか。

男2 ええ。

男1 そうするときは、なんか怒つてるみたいになつちゃうじゃないですか。

男2 はい、怒つてるみたいになってます。

男1 でしょお？

男2 はい。

男1 それはね、声を張つてると、怒つてるんじゃないかと勘違いしちゃうんですよ、脳がね。

男2 脳が？

男1 そう、脳が。

男2 はい。

男1 怒ってる時に発する声と、この距離で話す張ってる声とが、似てるからそういう事になる訳であつてね、そうするとね、いくらそういうつもりはなくても、だんだんと張ってる声が荒々しくなっていくわやうんですよ。

男2 はい、なってます。

男1 でしょお？私もね、声を荒げたい訳じゃないんですよ。その気持ちは分かってくれますよね？

男2 わかりません。

男1 おや、なんでかな？

男2 だってもう怒ってますもん。

男1 うん、だからそれは怒ってるみたいと感じさせているだけだから。その感じさせるプロセスについてはもう理解して貰ってる。私は思っていたんだけど違ったのかな？勘違いだったのかな？

男2 勘違いです。

男1 ああ、そうなんだ。

男2 はい。

男1 私はね、出来れば平和的に今後の話をしたいだけなんです。

男2 あ、はい。それは、はい。

男1 だからね、いつまでもこんな所に居たつてしょうがない事くらいあなただつてわかつてはるはずですよ？

男2 はい。

男1 うん、だからさ、相談しましょうよ。

男2 はい、します。

男1 うん、だからこつち来て。

男2 でもそつち行ったら私、まずどつかれますよね？

男1 えつとね。

男2 はい。

男1 どつかれるかどつかれないかは、あなた次第ですから。

男2 でも、もつとどつく気で居ますよね？

男1 うん、どつく気で居るんだろうと思わせてしまうのは、この距離で話しているのが原因なんだという事はなつき言いましたよね？

男2 はい。

男1 だからまずは距離を詰めないと。

男2 でも距離詰めたら私どつかれますよね？

男1 うん、どつかれるかどつかれないかは、もうここにきてから確かめて貰うしかないかもしれないね、やはり。  
男2 そうですか。

男1 うん、それはやっぱりそうだよ。だって幾らどつかないと言ったところで、君は信じないだろうし、私もいざ君の顔が近くに來たらそれはやっぱりどつかうかもしれないから。  
男2 そうですよ。

男1 うん。  
男2 じゃあやっぱりここはいいです。

男1 …じゃあ言うよ。この距離のまま言っちゃうけど、いいのね？

男2 はい。

男1 バスのカギ失くしたってどうい事？

ツア―客達、無表情のまま、ゆつくりと運転手の方を向く。

男2 どうい事って言うのは？

男1 だって失くしたんだよ。

男2 はい。

男1 どやったの？

男2 さあわからないです。

男1 そっだよ、どこにやったのかわからなくなった事を失くしたって言うんだから。

男2 はい。

男1 じゃあ、どうするんですか？

男2 はい。

男1 うん、はいじゃなくて。

男2 とりあえず、内緒にして下さい。

男1 うん、だからさ、(客達を指差し) もう言っちゃったから。

男2 会社に。

男1 うん、会社に言わないでって君が言うから私はこうして皆さんを不安にさせないように頑張って時間稼をしてた訳なんだけれども、その間君は何をやっていたかという必死にカギを探しているのかと思  
い、  
男2 はい。

男1 うん、それは何故なのかな？

男2 探しても無いから。

男1 ちゃんと探した？

男2 はい。

男1 じゃあ、無いんだね。

男2 はい、無いです。

男1 だとすると、やっぱり会社に報告して、スペアキーを取りに行かないといけないじゃないですか。

男2 でも会社には内緒にして欲しいです。

男1 うん、でももうそういう訳にはいなくなっちゃったよね？

男2 だって会社に知れたら私、怒られるじゃないですか。

男1 そりゃあ君がカギを失くしたんだから君が怒られるのは当然だよな？

男2 そこが分からないんです。どうして私がカギを失くしたから私が怒られるのは当然なのか。

男1 …えっだってカギを失くしたのは、君だよな？

男2 はい。

男1 じゃあやっぱり怒られるのは君だと思うよ。

男2 私がカギを失くしたのは結果です。しかしその裏には原因がある訳で、本当に悪いのはその原因を作りだした人だと思うんです。

男1 ほか、君がカギを失くした事に、どんな原因があったの？

男2 わかりません。

男1 あ、わからないんだ。

男2 はい。でも、世の中にはそういう原因のわからない不条理な結果がたくさんあると私は思っているんです。

男1 世の中の事はわからないけれども、カギを失くしたのは君なんだよね。

男2 私の場合、カギを失くしたという事実があるだけで、なぜカギが無くなったのかは誰もわからないという事になります。

男1 …おっとなんだか訳がわからないけど、応聞こうか。

男2 なぜカギが無くなったのか解らないんだとしたら、私は本当にカギを失くしたんでしょうか。

男1 …は？

男2 私は本当はカギを失くしてないんじゃないでしょうか。

男1 じゃあどこにあるの？

男2 わかりません。しかしカギを失くした事があるのは私だけじゃないと思うんです。

男1 うん、それはそうかもしれないね。私も失くした事はあるよ、カギ。

男2 ですよ。

男1 でも、それはバスのカギじゃないから、家のカギだから。

男2 本当にそれは家のカギだったんですか？

男1 その強引な話のすり替えは止めて貰えないだろうか。ちょっと無理があるからさ、それは  
男2 そうですか。  
男1 そうですよ。

「――」

ポケットから携帯電話を取り出すポロシヤツのおじさん。

男1 へん、どうしました？

客1 え？

男1 携帯。

客1 充電が。

男1 ああ。

客1 あのお。

男1 はい。

客1 充電機、ありませんか？

男1 えー、どなたか、充電器ありませんでしょうか？

誰も答えない。

男1 無いみたいですね。

客1 …。

男2 私ありますよ。

男1 え？

男2 充電機。

男1 あ、そう？

男2 はい。

男1 じゃあなんで今聞いた時返事してくれなかったのかな？

男2 聞かれた後で思い出したんです。

男1 ああ。

男2 そういつ事ってありませんか？

男1 ありますね。

男2 ええ。

男1 じゃあ貸してくれる？

男2 はい。

男1 良かったですね。

男2 (ポケットをもそもそと) あれ？

男1 ん？

男2 あれ？

男1 無いの？

男2 どーやったかな？

男1 それも失くしちゃったの？

男2 ああ、ありました。

男1 (客1に) 良かったですね。

男2 カギが。

男1 え？！バスのカギ？

男2 はい、ここは胸ポケット。

男1 そんなとこにあったの？！

男2 はい。

男1 君、ちゃんと探してた？

男2 探しましたよ。えっと充電器は…

男1 もついいよ、充電器は！

客1 …。

男1 ほら行くよ、待ってるんだよ、飛驒の匠が。

男2 はい。

男2、去る。

男1 はい、お待たせしました。それでは、飛驒の匠による、木彫りの熊とか小鳥とか彫ろうツア、出発致します。こちらです。

男1を先頭に二列で去っていく。同。

暗転。

バスの中。

とりあえず、椅子を6脚 縦に二列に並べてバスをイメージさせる事しておく。

男1は立っている。

男1 はい、それでは出発致します。安全運転に努めますが、止むを得ず急ブレーキなどを掛ける場合がございます、ご了承ください。えー、それでは…お座り下さい。

客達、座らない。

男1 …どうしました？

客2 あのお？

メガネを掛けた背広姿の細長い男が申し訳無さそうに手を挙げた。

男1 はい。

客2 これ、どこに座ったらいいんですか？

男1 …あ、ええ今回のツアー、座席に余裕がございます。えー、ですので、どうぞ好きなところにお座り下さい。

と云うとツアー客達は椅子を移動させ、文字通り舞台上の好きなところに座ってしまうので

もうバスのイメージも何もあつたものじゃない。

男1 …はい、出発します。

ぶーん

男1 えー、飛騨高山への到着時刻は、午後1時の予定でしたが、大幅に出発が遅れてしまいました事、深くお詫び致します。まあ、私のせいではないのですが。

男2 あのお。

男1 あ、本人からも言あるそうです。

男2 カーステ掛けてもイイですか？

男1 : (客達に) 失礼しましたー。  
男2 眠くなつてきちゃったんで。  
男1 ああ、そう。  
男2 はい。  
男1 でも今走り出したばかりだからさ、我慢しようか。  
男2 昨日寝てないんで。  
男1 知らないよそんな事。(客達に) えー、それでは到着まで「ゆ〜りお過〜し〜ください。何かありましたら、なんなりとこの私に仰ってください。出来る限りの対応はさせて頂きます。  
客1 あのお。  
男1 はい。  
客1 充電機、無いですか？  
男1 ああ…。  
男2 (ハンドル放して、ポケットを探る) えっと…。  
男1 あ、イイからハンドル持つて。  
男2 はい。  
男1 あ、ちょっと待つて貰つてもイイですか？トイレ休憩の時にでも。  
客1 今すぐ電源を入れたいんですけど。  
男1 今すぐですか？  
客1 ええ、もつ今すぐに。  
男1 あのお、どなたか携帯電話持つてませんか？  
客2 あのお？  
男1 あ、お持ちですか？  
客2 携帯電話、貸して下さい。  
男1 え？…あ、あなたも、ですか？  
客2 いえ、私にはありません。  
男1 …ん？  
客2 私は携帯電話要らないんですけど、携帯電話、貸して下さい。  
男1 : ああ、そういう事ですか。なんて優しいお方だ。申し訳ございませんが、私携帯電話を持つていないんです。  
客2 ああ、そうなんですか。  
男1 そうなんです。

大学生くらいの青年(客3)と目が合う。

男1 なにか？

客3 あのお？

男1 はい。

客3 携帯電話、貸して下さい。

男1 : 今、携帯電話は持っていないという話をしていたじゃないですか私。

客3 それは本当ですか？

男1 そんな事嘘ついてどうするんですか？私は、携帯電話を持つ事を拒んでいる人間なんです。今の時代みんな携帯電話持つてるじゃないですか。だから私は、人類で最後に携帯電話を持った男になりたいんです。

客4 あのお？

ぼつちやり体型の主婦が手を挙げた。

男1 あ、はい。

客4 結局は持つんですよね？

男1 はい、結局は持ちます。

客5 はい！

「見中学生男子のように見えるが、実際の所は何歳なのかわからない女が元気良く挙手。

男1 あ、何か？

客5 携帯電話を貸して下さい。

男1 : あなたも持つてないんですか？

客5 はい。

男1 すいません、私携帯を持つてるを拒んでいる人間なので、「という事を言えなかったところなので。

客5 わかりました。

男1 すいません。

客2 あのお？

男1 はい。

客2 運転手さんにも聞いて貰ってイイですか？

男1 …、君携帯どこにある？

男2 私、持ってません。

男1 …え？

男2 はい。

男1 なんで持っていないの？

男2 家に置いて来ちゃったみたいです、ありませんから。

客1 あのお？

男1 はい。

客1 私は別に、携帯電話を貸して欲しい訳じゃないんです。

男1 え、でもどこかに電話したいんじゃない？

客1 私の話聞いてなかったんですか？私は、今すぐ電源を入れたいんです。携帯電話の電源を。

男1 …あ、ああ、そういう事だったんですね。すいません。

客1 どこに電話するって言うんですか？この私がどこに？

男1 …あのお、どなたかこの方に充電器を貸してもイイと言う方、いらっしゃいますか？

皆、無反応。

客1 (立ち上がり) 降ります。

男1 え？

客1 降りして下さい。

男1 いや、ここ高速道路ですから。

客1 さっきから聞いていると、ここに居る人誰も携帯電話持っていないじゃないですか。こんなに人が居て、今時誰も携帯電話持っていないなんてそんなおかしい話がありますか？そんなに皆人類で最後に携帯電話を持つた人間になりたいんですかね？どうも信じられなくて。

男1 皆さん！本当に携帯電話持っていないんですか？我々は同じツアーの参加者じゃないですか。助け合って行きましょう。ね、正直に言って下さい！

客4 手を挙げる。

男1 ふう、持っているんじゃないですか。

客4 デジカメならあるんですけど…。

男1 あ、デジカメならあるぞうですよ！

客1 デジカメ持つてるからなんなんですか？

男1 …。(客4に) デジカメ持つてるからなんなんですか？我々は公携帯電話を探しているんですよ

客1 もついいです。トイレ休憩まで待ちます(座る)。

男1 ぞうですか、なんかすいません

客4 …私は、もしかしたら写真が撮りたいのかと。

男1 え？

客4 今の携帯電話は大抵カメラが付いていますから。電話を掛けたい訳じゃなく、電源が入りたいという事でしたのでぞういう事かなと。

男1 …ああ。

客4 すいませんでした。

男1 …あ、こちらこそなんか…、すいません

客5 ああ！

男1 はい？

客5 雪が降って来ました！

男1 (前方を見て) あ、ホントですね！降って来ましたね

客5 私、雪を見たことが無いんです。

男1 あ、そうなんですか。じゃあ見れましたね

客5 はい！

男1 あなたの記念すべき日に立ち会えて、私も嬉しいです。

客5 ありがとうございます。

男1 いえいえ。

客5 ところで

男1 はい。

客5 これは本当に雪ですか？

男1 え？

客5 私、雪を見たことが無いのに、これを見た瞬間に雪だと思っただけです。でもそれって間違ってるんじゃないかと思っただけです。それってなんだかちよつと怖い事なんじゃないかと思っただけです。なんとというか、

男1 …なるほど。

客5 はい。

男1 でも大丈夫ですよ、私は雪を見たことがあります、これは間違いない雪です。

客5 わかりました。

客3 あのお、

男1 はい。

客3 こっちにも雪が降って来ました。

男1 …、あ、そうですね。

客3 はい。

男1 そりゃあ、あっちこっちに降りますよねこの範囲だったら。

客3 そうですか。

男1 え、もしかしてあなたも雪を見たことが無いんですか？

客3 いえ、毎年ボードに行ったりはします。

男1 そうなんですか。

客3 はい。

男1 じゃあ雪というのがピンポイントに降るのではなく、あっちこっちに散らばって降る事くらい知ってますよね？

客3 はい。

男1 じゃあ黙って下さいね。

客3 さっき何かあったら仰ってくれと言っていたので。

男1 はい、それは確かに言いました。でも報告は結構です。雪が降ってきたことは私にもわかりますので。

客3 言いたかったです。

男1 そんな子供みたいな事言わないで下さいね。

客3 虹を見つけた時、一人しかいなくても、あ、虹、って言いたいです、僕。

男1 わかりますよその気持ちは、じゃあ独り言でいいじゃないですか。わざわざ私に報告しなくても。

客2 すいません。

男1 はい、何か？

客2 雪が降って来ましたよ。

男1 …知っています。今ちようどそういう話をしていたところですから。

客2 そうなんですか。

男1 ええ、でもわかりますよ。言いたいですよね、子供みたいに。

客2 そうなんですか。

男1 はっ聞いてます？

客5 あの。

男1 はい。

客5 ホワイトクリスマスですか？

男1 クリスマスじゃあないです、今日は。

客5 はい。

男1 言っておきますが、雪が降ったらクリスマスだというのは大きな間違いです。

客5 わかりました。

客4 (手を挙げて) はい、先生。

男1 私は先生じゃないですけど何ですか？雪が降って来たんですか？

客4 はい。

男1 そうですか。

男2 あのお、

男1 なにに？(急に名古屋弁)

男2 雪が降ってきたんですけど。

男1 知ってるて！今ひとしきりこっちで盛り上がってたのだがや。盛り上がってたかどうか知らんけど。

男1は興奮すると名古屋弁になるみたいです。

男1 ていうか雪が降って来たからなんだて！

男2 カーステ掛けてもイイですか？

男1 なんて雪降ってきたらカーステなんだて、意味わからんがや！

皆、横目で男1を見る。

男1 :(咳払い)、お休みになられる方も居ると思いますのでね。

客2 …あのお、

男1 はい、何か？

客2 私は、眠れないと思います。

男1 ああ、そうですか。

客2 はい。

男2 じゃあ、掛けますね。

客3 あの

男1 はい。

客3 僕は、眠りません。

男1 …えっと、それは音楽を掛けても、イイという事ですか？

客5 はい！

男1 どうぞ。

客5 私は、音楽を掛けてもイイと思うんですけど。

男1 あ、そう。

客1 あの

男1 はい。

客1 私なら、トイレ休憩までなら掛けてもイイと言いますけどね。

客4 あのお

男1 どうぞ。

客4 でも私は音楽を掛けるのは反対ではないです。

男1 あのですね皆さん、人の話はちゃんと聞きましょう。皆さんさつきからずっと同じ事を言ってますからね。一人が言った事をいちいち反復しなくても、同意でしたら心の中で思ってくれたらそれでいいです。今、この話を集約しますとね、音楽を掛けてもイイと言うことになってますけど、それでよろしいですか？

客達、無反応。

男1 …なんでそこはなんにも言わんのだて。

男2 じゃあ掛けまーす。

男2、カーステのスイッチを押すと、

男2 ♪おーぶれねり、あなたのの

男1 …お前が唄うんか。

続いて客1、客2と、どんどん歌う人が増えて行き

「おーブレネリ」の輪唱になる。

いよいよ残るは男1、歌い出さずとしたところまで。

男2 急ハンドルを切る！  
ガードレールにぶつかった  
「ギイイイイーガシャン！！」

男1 …な、何？どうしたの？ー何があつたの？  
男2 いえ…。

男2 エンジンを掛ける。

ギユルキユルキユルキユル…、キユルキユルキユルキユル…」

男2 掛かりません。

男1 うん、だ、何があつたんだて？

男2 ぶつかりました。

男1 知ってるで。

男2 はい。

男1 だからそれはなんで？

男2 猫を、

男1 猫？

男2 白い猫。

男1 うん。

男2 あ、黒かつたかもしれない。

男1 白でも黒でもどつちでもいいけど、猫か何？

男2 轢いちゃいました。

男1 …うん、でも猫轢いちゃうくらいで、事故つたりはしないですよ。

男2 今、なんて言いました？

男1 …は？

男2 猫の事はどうでもいいと？

男1 …だつてそれよりも我々の、いやお客様の身の安全の方が大事ですよ。

男2 じゃあ猫は轢いてもイイって言うんですか？

男1 あのね、こんな時に君と猫の事で言い争っている暇はないんだ。ちょっと、あの、会社に連絡して。

男2 ネコは、轢いても良いんですか？

男1 あ、携帯持っていないのか…、あのお、どなたか携帯電話持ってませんか？

ツア―客 無反応

男1 あー…。あのお、ちょっと待って下さい。ここ高速道路ですから、緊急連絡用の電話ボックスがあるはずなんで。

男1 バスから降りる。

男1 うー、寒いなあ…。

気づくと、男1の後ろから客達が付いてきている。

男1 あ、どうしましたら待って下さい。すぐ、連絡取りますから。

誰も答えない。

男1 あの、席に着いて待って下さい。寒いですが。

客達 空を見上げている。

男1 あ、雪を見てるんですか…？あの、ここ高速道路ですから、危ないですから、バスに。

男2もいつの間にか降りていて、ゴミ袋を持ってきた。

男2 猫じゃなかったみたいです。

男1 …え？

男2 猫かと思ったらコレでした。しかも白でも黒でもなく、普通の燃えるゴミの袋。ははは、笑っちゃいますよね。透明の燃えるゴミ袋を猫と目間違っなんて。あはは。

男1 …笑った場合じゃねえだろ。

男2 いやあ、良かったです。

男1 …君さ、緊急連絡用の電話ボックス、見なかった？

男2 さあ、見ないですねえ。

男1 私、この先に行ってみるから、君は戻って探してみて。

男2 嫌です。

男1 …え？

男2 私、ここを待っています。

男1 …、うわ、危なかったよ。私、もう少しで君の首を絞めてたところだ。

男2 ここで待っていたら、車を通るかもしれないです。

男1 …ああ、なるほどね。

男2、バスに戻る。

男1 じゃあ、戻りましょうかね？寒いですからね。

皆、バスの中へ。

男1 ちょっと、君？…ちょっと！

男2 私ですか？

男1 …君なんでそんなところに座ってるの？

男2、最後部席に座っている。

男2 え？

男1 え、じゃなくて？

男2 だってこのバス、もう動かないですから。

男1 うん、でも君は運転手だよ？

男2 ええ、でも私がそこに座っても、このバスは動きませんから。

男1 おい、そういう問題じゃねえだろ。

男2 私が運転席に座ろうが座るまいが、このバスは動かないなら、私はここに座ってたいです。

男1 座ってたいって言われてもさ…

男2 だってそっち行ったら私、怒られますよね。

男1 うん怒られるか怒られないかは君次第ですから。

男2 だってもう怒ってるじゃないですか。

男1 うんだからそれは君がこつちに来ないからですよ。

男2 どうせ怒られるならこいでイイです。

男1 だからこの距離だとどつしても声を張らないといけないじゃないですか？そんなに怒ってるみたいになっちゃうじゃないですか！つてまじきやめたよねこのやりとり！

男2 そうですか。

男1 …、君さ、運転手ですよ。

男2 はい。

男1 私は添乗員。

男2 はい。

男1 あなた運転手、私添乗員。

男2 はい。

男1 同じ旅行会社に勤める者としてね、責任というかさ、お客さまの安全を第一に考えて、こんな時にそのお客様自身に考えて貰う訳にはいかないですからね。

客達 男1を見ている。

男1 そこはや、ぼり私達が考えないといけないだろうっていう目をね、私はずーっと向けられている訳ですよ。

男2 はい。

男1 なんで私はつまり考えなくちゃいけないのか。元はと言えば君が悪いのに、なんで私はつまり考えなくちゃいけないんですか！……とね、声を荒げてしまっただけ、この距離だとね。

男2 元はと言えば私が悪い、というのは違つと思えます。

男1 おや、それはどういう事かな？だって君事故ったじゃん。それでバス動かなくなっちゃったじゃん。

男2 事故ったんじゃないです。高速道路のフェンスにぶつかったんです。

男1 うんだから、世間一般的にはそれを事故ったって言うんだよね？客達に、そうですよね？

客達、無反応。

男1 ですよええー？

男2 なんて高速道路のフェンスにぶつかったかと言つと

男1 うん、速く喋ってくれないかな。イライラしちゃってしょうがないんだよね、ごめんね。

男2 猫が、

男1 うん、それはゴミ袋だったじゃないですか。

男2 ええですから、元はと言えば私が悪いのではなく、そのゴミ袋が悪いと思うんです。

男1 うんだから、ゴミ袋を猫と間違えてハンドル操作を誤った君が悪いんだよね。

男2 いえ、ゴミ袋を猫と間違えてしまうような、そんな猫が悪いと思うんです。あるいは、こんな所に猫が居るかもしれないと思わせてしまっている飼い主が悪いんです。もしそれがのら猫だったとしたら、のら猫が入って来てしまおうと思わせるような高速道路を作った高速道路会社が悪いんです。その高速道路を民営化したと言いながら、実際はその高速道路を食い物にしている道路族と呼ばれる政治家が悪いんです。そんな政治家を選んでしまった、国民が悪いんです。つまりあなたが悪いんです。

男1 ……

男2 という事です。

男1 ……これは困ったことになりましたぞ。とんだ運転手に当たってしまった。皆さん、今回のツアーは、ハズレです！ すいませんね、なんか。という事で、私は、添乗員を辞めます。こんな旅行会社、辞めてやる！

男1、小旗を車外へ抛り捨てる。

客達、無反応。

男1 というのは嘘で…、嘘です。嘘ですよお。びっくりしました。だってここね、私が仕事を投げ出してしまったり、あんな訳のわからない運転手しか居なくなってしまうんですから、そんなひどい事は出来ませんよお。私が、皆さんを安全に、安全かつ快適に、送り届けてあげますから、安心して下さい！

男1、バスを降り、小旗を拾いに行く。

男2、その間に運転席に戻って来て、カチャカチャ カギを締める。

男1 (バスに乗ろうとして) あれ、ちょっとーおいーなにカギ締めとんだ！ おい！ こら！ ……あし、さぶいーちよとー！ ……

男2 だってカギ開けたら私、どつかれますよね？

男1 うん、どつくかどつくかは開けてみてからの話だからさ！

男2 結局どつくんじゃないですか。

男1 いや、どつかない！ もつどつかないから開けて！

男2 私だってこんな事したくないんです、こんな事。

男1 わかったから、もつどつくなんて言わないから、ね。さぶいー！

まず客2が立ちあがる。続いて他の客達も。

そして、バスのドアを開けた。

カチヤ

男1 …え？

客2 …ケンカは、止めて下さい。みんな、このツアーを楽しみにして来たんです。

客達 男1を見ている。

男1 はい…。

皆 席に戻る。

男1、バスに乗り込み、すぐ男2に、

男1 てめえこの野郎…。

男2 ケンカは止めて下さい、との事です。

男1、客達を見回し、

男1 …どこが楽しみなんだ、こんなツアーの！

男1、手に持っていたパンフレットを引き裂いた。

暗転。

辺りには少し雪が積もっている。

男1、寒さに震えながら、

男1 車、ちつとも通らんじゃないか…。

男2 通りませんね。

男1 皆さーん、大丈夫ですかあ？寒くないですかあ？

客達、無反応。

ギ ユルキ ユルキ ユルキ ユル…、キ ユルキ ユルキ ユルキ ユル…

男1 掛からない？

男2 ええ。

男1 せめてエアコンでもつけてくれたらね。

男2 ええ、付かないですね、

男1 そつ。

男2 カーステ。

男1 …うん、カーステはイイんじゃないかな今は。

男2 歌でも唄えば、気が紛れるんじゃないかと思ひまして。

男1 なるほどね…。あ、じゃあどうですか皆さん、しりとりでもしませんかね、しりとり。じゃあ私から行きますね、しりどりの「り」！はい。

客1 りんご屋。

男1 …りんご、で良いんですけどね。まあいや、じゃあ、りんご屋の「や」！

客2 焼肉屋。

男1 …焼肉、だけで良いんですけどね。じゃあ、焼肉屋の「や」！

客3 焼き鳥屋。

男1 …えー焼き鳥屋の「や」。

客4 やきいも屋。

男1 はい「や」。

客5 やきそば屋。

男1 …。

男2 焼き魚屋。

男1 あのお皆さん、別にナニナニ屋ってつけなくてもいいんですけどね。そしたらなんでも、屋をつけねば良いことになっちゃいますから。

客5 あのだ！

男1 はい。

客5 焼き魚屋というのは、どこにあるんですか？

男1 …、どこにあるの？

男2 さあ？

男1 あのお、無いと思ひます。

客5 無いんですか？

男1 ええ。

客5 わかりました。

男2 確かに焼き魚屋なんて聞いた事ないですね。

男1 じゃあなんで言ったんだて？

客4 あのお？

男1 はい。

客4 焼き魚を売りにしているお店は、定食屋に分類されるんじゃないでしょうか。

男2 私も定食屋だと思っただけです。でも、頭の文字が「や」だったから仕方なく。

男1 そりゃあ皆ナニナニ屋ってするからね。

客3 あのお。

男1 はい。

客3 このしりとりはお腹が空いて来るので止めてください。

男1 いやだからナニナニ屋ってするからさ…。

客3 お願いします。

男1 あの皆さんね、ナニナニ屋はっかだと、しりとりがつまらなくなっちゃいますから。そしてたいい何かを焼きますから。焼き物屋はかりだと、お腹も空いて来ちゃいます。

客1 あの。

男1 はい。

客1 充電機を、貸して下さい。

男1 あ、そうですねー充電機があれば電話が掛けられる。おい、

男2 はい。

男1 充電機。

男2 ありません。

男1 …はっ君さっきあるって言ったじゃん。

男2 持ってませんでした。

男1 え、なんで？

男2 忘れて来たみたいですが、ありませんから。

男1 ちゃんと探した？

男2 はい。

男1 もっとよおく探してみても、さっきだつてポケットからヒョイツと出てきたがね。

男2 でも無いと思います。

男1 いや、思いますしやなくてさ。

男2 携帯電話を忘れてきたのに充電器だけ持って来ても意味無いですからね。

客1 私、降りますね。

男1 いや、ちょっと待って下さい。おい！

客4 あのお、

男1 はい。

客4 ここ、ホントに高速道路なんでしょうか？

男1 え？

客4 ちっとも車が通りませんけど。

男1 ええ、ですが我々は高速道路に乗って飛騨高山に向かっていたのです。それはそういう風にルートがあらかじめ決まっていた事ですから。

客4 はあ。

男1 ですからここは高速道路に間違いありません。

客4 でも全然車が通りませんけど。

男1 まあ平日ですからね。

客2 あ、いいですか？

男1 あ、はい。

客2 この辺りに民家は無いですか？

男1 私に聞かれても、私はこの辺りの住民ではないので

客2 民家を探しに行つた方が早いような気がしますけど。

男1 あ、確かにそうですね、でも、

客2 でも、私の言うことなのでどうせ間違つてますから、聞かなかつたことにして下さい。

男1 …なんでそんな卑屈なんですか。

ポケットに軽く手を入れた男2が、

男2 あ、の、

男1 なに？

男2 ありました、充電器。

男1 え？！

男2 ここに。

男1 …ねえ君さ、ちゃんと探してお願だから。

男2 探そうと思つて見つかからないんですよ、探し物という奴は。

男1 もう君と話してるとどうにかなつてしまったださ、ありましたよ充電器！

客1 ああ、これで電源が入られる。

客1、携帯に充電器を差し込む。

客2 あの

男1 どうですか？

客2 コンセントはどのですか？

男1 …おい、コンセントでいい？

男2 え、あるんですか？バスにコンセントが。

男1 …。

客4 あのお

男1 …はい。

客4 うちの車にはあります。

男1 あなたの車にあつてもね…。

客4 ですがエンジン掛けないと付きません。

男1 …。

男2 そりゃあどうですよ。

客1 あの…。

男1 …はい。

客1 お返します。

男1 …はい。

客5 あの

男1 はい？

客5 寒くなつてきました。

男1 ええ、寒くなつてきましたね。

客1 すいません。

男1 はい。

客1 じゃあ降ります。

男1 いや、ちょっと待って下さい。

客4 あのお

男1 はい。

客4 や、やはりここは高速道路なんでしょうか？

男1 うん、ですから、

客3 あの

男1 もう皆さん！いちいち私に許可取らなくていいですから、勝手に喋って下さい！！！！

皆 固まる。

男1 …、すみません。はい、何か？

客3 ここは高速道路じゃないと思います。

男1 えーっと、それはどうしてですか？

客3 なんとなくです。

男1 なんとなくですか？

客3 はい。

男1 なんとなくの発言は控えて頂きたい。

客4 あのお

男1 はい。

客4 運転手さんは、どう思っているんでしょうか？

男1 え？

客4 運転手さんは、ここが高速道路だと思ってるんでしょうか？

男1 …おい。

男2 はい。

男1 君、まさかとは思っけど…

男2 はい？

男1 …ここ、高速道路じゃないの？

男2 そんなの決まってるじゃないですか、

男1 だよな。(客4に) だ、そうです。

男2 はい、高速道路じゃありません。

男1 …、今なんて言った？

男2 高速道路じゃありません。

男1 ……どうして高速道路じゃないの？

男2 まだ乗ってないですから。

男1 うん、だからなんで乗ってないの？

男2 動かなくなっちゃったので、バス。

男1 うん、私が言ってるのは動かなくなる前の話。だつて出発してすぐに、高速に乗る予定だつたよね？

男2 はい、その予定でした。

男1 うん、だからなんで乗ってないの？

男2 道に迷っちゃいました。

男1 …道に、迷った？

男2 はい。

男1 だつて出発してからまだそんなに走ってないよね？

男2 はい。

男1 うん。

男2 出発してすぐ道に迷ってしまったんです。出発して駐車場を出た道を、左に行けば良かったのに、右に曲がったのが失敗でした。

男1 それ、ド頭の話じゃん。

男2 だからすぐにつて言ってるじゃないですか。

男1 …君はさ、

男2 はい。

男1 どうしてそれをその時言わないの？

男2 だつて、怒られるじゃないですか。

男1 うん、怒られる怒られないの話じゃないと思うんだよね。というか君、怒られることから逃げ過ぎだよ。ダメだよそういうの。

男2 このまま行っても乗れるんじゃないかと思っただんです、高速。

男1 うん、でも乗れなかったよね？

男2 乗れませんでした。

男1 …え、何？君はずっと迷いながら運転してたの？

男2 ええ、なので動揺を悟られないように唄ったりしてたんです。

男1 そのお陰で事故つとつたら世話ねえがや。

男2 違います、そのお陰で事故ったんじゃないやありません、猫を轢いたと思っただんです。

男1 うん、ゴミ袋ね。

男2 はい、振り返ってみれば。

男1 じゃあ何？ここは高速道路じゃないんだ。

男2 はい。

男1 じゃあどこなの？

男2 わかりません。

男1 …えー、皆さん、これは大変な事になっています。我々は、今どこにいるのかもわからず、そして外は雪が降っています。エンジンも掛かりません。携帯電話もありません。助けを呼ぶにも手段が無い状況で

す。えー、私もあのまま緊急連絡用の電話ボックスを探しにいかなくてホント良かったです。だって幾ら歩いてもそんなもの無いんですから、危うく遭難するところでした。皆さん落ち着いて下さい。落ち着いて、今後の方針を話し合います。

客2 はい。

男1 どうぞ。

客2 この辺りに民家は無いですかね？

男1 そうですね、いよいよ民家を探しに行った方がいいかもしれませんね。

客2 出発してからまだそれほど遠くには来ていないとは思っています。ですがそれも私の意見なのでどうせ間違ってると思うので聞かなかったことにしてください。

男1 いや、あなたの言う通りですよ！いくら見渡す限り何もない木ばかりの景色とは言え、方向が分からなくなるほどの山奥ではないはずですよ。皆さん、さあ行きましょう！

客4 あのお、

男1 はい。

客4 皆で行くんですか？

男1 ああ、そうですね…、全員で行く必要はないですね。ここは男性の皆さん、手分けしてよろしくお願いします。

客1 あの、

男1 はい。

客1 民家に辿り着いた人は、助けを呼ばいいんですよね？

男1 そうですね。

客1 民家に辿り着けなかった人は、どうなるんですか？

#### 間

男1 …、わかりました。じゃあ私と、おい、

男2 はい？

男1 二人で行って来ますので  
客3 でも  
男1 はい。  
客3 あ、すいません、イイですか手を挙げる？  
男1 ええ、もろ皆さんさつぱらんに喋って貰って結構ですから。非常事態ですし。  
客3 お二人は民家に辿り着けないと思います。  
男1 …おっとそれは随分不吉な事をおっしゃいますね。どうしてそう思うんですか？  
客3 なんとなくです。  
男1 なんとなくで喋るのホント止めて下さいね。  
客2 はい。  
男1 はい。  
客2 確かに、お二人が民家に辿り着けない可能性だってありますよね？  
男1 …まあ、そうですね。  
客2 我々はこので待っていて、お二人が民家に辿り着いたか着いていないのかわからないまま待ち続けるのですか？  
男1 …じゃあ、こうしましょう。夜になつて助けが来なければ、どなたかがまた、民家を探しに出掛けるというのは、  
客5 はい！  
男1 はい。  
客5 あなたは私達を見捨てるのですか？  
男1 いや、そうじゃありません。夜になつても救助が来ないという事は、我々はまた民家に辿り着いてはいないという事です。  
客5 その場合、お二人はどうなるんですか？  
男1 …民家に辿り着ければ幸いですし、辿り着かなければ…  
客5 死ぬんですか？  
男1 …まあこの雪ですし、最悪そうなるでしょうね。  
客5 わかりました。  
男1 …でも、きつと見つかりますから、大丈夫ですよ。だってそんな山奥じゃないんですから。心配しないで下さい。  
客5 はい！  
男1 …いや、ちょっとは心配して下さい。  
客5 わかりました。  
男1 じゃあ…、行つてきます。

男1 (バスから降りようとして) おい、

男2 はい？

男1 行くぞ。

男2 え？

男1 え、じゃなくて、行きますよ。

男2 いや、私行きませんよ。

男1 ……どうして？

男2 どうして私が行かなくちゃいけないんですか？

男1 だって誰かが行かないとしょうがないでしょ。

男2 誰かが行かなくちゃいけないなら、私じゃなくてもいいと思います。だって死ぬかもしれないんですよ？

男1 ……うん、でもそれは最悪の場合だからね。まず大丈夫だと思うから。

男2 大丈夫だと思っても、大丈夫じゃない目に遭った人が居る事くらい知ってます、ニュースや新聞で。

男1 まあ、そりゃあね。この雪だしね。

客4 あの、

男1 はい？

客4 どんどん降って来ます。

男1 そうですね。

客4 はい。

男2 無理だと思うんです、私とあなたが探しに行っても、絶対民家なんか見つからないと思います。

男1 君はなんでそういうマイナスな事言うのかな。

男2 そんなに運良く無いですから、

男1 うーん、

男2 あなたは、

男1 ……うん、確かにね、運が良かったら君なんかのバスに乗ってないよ。でもね、こんな事お客様には頼めないでしょう？

男2 じゃあ私の意見も聞いて下さい。

男1 だって聞いたら君、嫌だって言うでしょ。

男2 聞いてもいないのに決めないで下さい。

男1 じゃあ聞いたら良かったの？

男2 はい。

男1 じゃあ一緒に行ってくれる？

男2 嫌です。

男1 ほら。ほれみろ！

男2 だってこの雪ですよ、絶対死にます。

男1 死ぬ死ぬ言わんといってくれる？

客1 あのお

男1 はい。

客1 じゃあ、私行きますよ。

男1 …え？

客1 私、行つてきますから。

男1 …そんな、良いんですか？

客1 はい。

客1、バスから降りようとする。

男1 ありがとうございます！

客3 すいません。

男1 はい。

客3 その人、民家に辿り着いたら、助けを呼んでくれるんでしょうか？

男1 …え？

客3 一人だけ、逃げそうな気がします。

男1 なんて事言うんですか！せつかく言つてくれているのに。

客3 もちろん、なんとなくですけど。

男1 なんとなくで人を不快にさせないで下さい！

客1 あのお、イイですか？

男1 あ、すいませんねえ、なんか…。

客1 私は、そんな薄情な男に見えますか？

男1 いえ全然、むしろ、悪と戦う勇者に見えます。

客1 そうですか…。

男1 はい！

客1 あなたの眼は節穴です。

男1 え？

客1 私は清廉潔白な人間ではありません。私の心の中は腐っています。自慢じゃありませんが、私の人間関係は最悪です。人を不快にさせることにかけては私の右に出るものは居ません。彼の不快なんて私に比べれば爽快な方です。私に話す人は、必ず私を嫌いにし、それに輪を掛けて私も相手を嫌いにします。

男1 …いや、そんな事ないと思いますよ。

客1 気休めはよして下さい。私は別にそれでイイと思っただけです。人間社会なんてみんなそんなものです。どいつもこいつも腐ってますから、期待してもしょうがないです。ですから私に期待しないで下さい。彼の言うとおりに、私は民家に辿り着いても助けなんて呼ぶつもりはありません。なぜなら私はあの人が嫌いだからです。あの人が私を嫌いだと思っただけです。私は嫌いだからです。

男1 …。

客1 では、失礼します。

男2 ちょっと待ちな。

客1 はい。

男2 あんた自分の事を世界で一番腐っているみたいな言い方をするが、勘違いしないで貰いたい。この世の中で一番腐っているのは私だ。イイですか、あなたが私を嫌うその何百、何千、何万倍も、私はあなたを嫌っていますよ。

客1 …。

男1 そおですよ、あなたなんかまだまだ腐ってないですよ！こいつの方がよっぽどです。我々をこんなひどい目に遭わせておいて、一言も謝ろうとしないんですよ！こいつは！それどころか、自分の正当性はかりを主張する。私はこの男ほどこの世に無用な人間には会ったことがない。

男2 添乗員さん、それは言っちゃいけない。この世に無用な人間など存在しない！

男1 …、お前が言うな！

客4 (手を挙げて) はい。

男1 あ、はい。

客4 だったらやっぱり皆で行くしかないんじゃないでしょうか。誰も信用出来ないんだから、皆腐ってるんですから。

男1 いや、別に皆腐ってるなんて言っただけだからね。

客2 あの

男1 はい。

客2 (立ち上がり) 言っただけです。

男1 え？

客2 私にも、お前は腐ってるって。

男1 …いや、え？

客2 今の話の話を聞いていると、私だけ腐ってないって言われているような気がするんです。

男1 うん、別にそんな事はないと思いますよ。

客2 私だって、人一倍腐っていたんです。

男1 あのお、腐ってる自慢をしている訳ではないんですけどね。

男2 大丈夫ですよ、あなただって十分腐ってます。もう腐って腐って変色してます。

客2 それはひどいです。(頭を抱え座る)

男1 ……どう集まりなんだこれは。

客5 (手を挙げて) はい!

男1 ……どうぞ。

客5 今、窓を開けてみたんです。

男1 なんで開けるんですか?

客5 すると外と中、あんまり変わらないくらい寒いんです。

男1 そうですね、もつほとんど変わらないですね。

客5 はい。

男1 でも開けないで下さいね、雪が入って来ますから。

客5 わかりました。

男1 ……じゃあ、行きますか、全員で。ね?

客達 無反応。

男1 どうしてこういつ時は何も喋らないんですか? どうして決断を私に委ねるんですか…?

客達 ……

男1 もつ…。

と、後方から大型トラックのクラクションが鳴り響いた。

男1 ……え?

ブザー!! トラックが近づいてきた。

男1 あ…、ああ…、皆さん、車ですよ、車ですよーおい!

男1、トラックの方に駆けよると運転手の女が運転席に座ったまま顔を出した。

「これもありあえず、大きな脚立の上に乗っているつもりで書いている。」

女 ……はい？

男1 助かったあ。もうダメかと思いましたよ。我々は今から飛騨高山に行って、飛騨の匠に木彫りの熊とか小鳥とかの作り方を教えて貰う為に向かっているバスターの者です。

女 木彫りの？

男1 ところがバスが動かなくなってしまって、ほとんど困り果ててしまっていたんです。でも良かったあ。皆さん、助かりましたよ。

皆 ぞろぞろと男1の元へ。

男1 本当にありがとうございました。あなたは命の恩人です。

女 はあ、(バスを見る)。

男1 実はあのバス、もう動かないんです。ガードレールにぶつかってしまっ

女 ガード…レール？

男1 いや、完全くガードレールにぶつかるといのはどうい事なんですかね？ガードレールはレールをガードする為の物だというのは。(男2に) お前だよ、ちゃんと聞いとけよ。

女 ……(バスを見ている)。

男1 見ろ、ガードレールは喧嘩を売る相手じゃない、命を守ってくれるものだ。そうおっしゃっているんだこの方は、そこを忘れちゃいかんですよ。(女に) こいつはですね、人類史上最低の運転手ですからね、(バスを見て)下さいね。

女 あのお…

男1 さっそくですが、町まで乗せて行って貰えませんかあれだしたら私一人だけでもいいです、助けを呼べればそれで。

女 えっと…

男1 ありがとうございます！じゃあ皆さん、待っていて下さいね。

女 (時計を見る)。

男1、助手席のドアに手を掛ける。

女 ……

男1 あ、すみません。私とした事が気ばかり急いでしまっ。あなたが女性だという事をすっかり忘れていた。

客5 はー！

男1 はい。

客5 女性のトラック野郎なんてかっこいいと思います。

男1 そうですよ。でもこの方は女性ですから、野郎ではないですね。

客5 わかりました。

男1 でもホント、女性の細腕でこんな大型トラックを運転するなんて尊敬します。日本全国津々浦々、荷物を運んでらっしゃるんですね。

女 (時計を見る)。

男1 ああ、急いでいるんですね、わかりますよ。わかります。我々も、このままでは凍え死んでしまいます。さ、乗せて下さい私を。

男2 ああ、

男1 なんだね、私は空忙しいんだ、君に構っている暇はない。さあ、よろしくお願いします。

男2 この人は、バスをどけて欲しいんじゃないですかね？

男1 は？

男2 このままだとバスが道を塞いで進めませんから。

男1 え？

女、前方を見て、指で間隔を測ったりしている。

男2 ほら、バスをどけて欲しいんじゃないですかね？

男1 ああ、バスをどけるなんて無理に決まってるじゃないか。大丈夫です上皆さん、私が必ず助けを呼んで来ますからね。

男2 ほら、困った顔をしている。

男1 わかっていますよ。でもしょうがないでしょう、あのバスは動かないんですから。だいたいたったこれだけの人数に、あんな大きなバスを走らす事もなかったんだ。まさに資源の無駄遣いだよ。

女 (後方を見る)。

男1 あ、そうですね、この道の幅だと、しばらくバックで進まないといけないでしょうね。皆さん、ちょっと後ろを見てあげて下さい。

客達、見ている。

男1 轆かれないように注意して、危険な時は声を上げて下さいねー！

び、び、び、バツ…ます。び、び、び、バツ…す… 途切れ途切れのアナウンスが流れる。

動かない。

男2 あのお、

男1 なんたいつるさいなあ。

男2 ちつともバックしません。

男1 雪道ですから慎重になつておられるんです、黙つてなさいと君は、どうぞー。

男2 それにひどく錆びついたアナウンスです。

男1 それはですね、この方はバックをほとんど使わないんですな。きつと運転が上手なんです。バックをしないという事はつまり、予測行動の正確さと、誰かさんのように道に迷つたりもしないという事です。良かったですね皆さん、我々は地獄で天使に会いましたよ！

男2 あのお、

男1 オーライ、オーライ！

男2 一向にバックしません。

男1 さ、どうぞー、あんな奴轢き殺してしまつていいですから。オーライ！

男2 もしかしたらこの人、バックが苦手なんじゃないですか？

男1 コー！女性に対してバックが苦手とか言うんじゃないよ、失礼じゃないか君は！

アナウンス 止まる。

女 :(恥ずかしそうにうつむく)。

男1 あー、すいませんね、あいつはホントにデリカシーの無い人間です。わかりました、もうバックとか結構です。あなた様がバックをしなくても済むように、我々がバスを脇に押しますんで、さあ皆さん、生懸命バスを脇に押ししてみましようーなんなら押ししてるふりだけで構いません。我々だって力を合わせればなんとかなるはずです！ 我々だって力を合わせればなんとかなるはずだ」というところだけでも見せてやるのです！

皆 あつざりとバス椅子を脇に寄せる。

男1 はい、出来ました。これでもうあなた様はバックをしなくて良くなりました。良かったですね。じゃあよろしくお願ひします！

おん おん ぶらぶらぶらぶら...

男1 あ、ストップ、ストップーまだ乗つてません。どこに乗つたらいいですか？

女 ... (時計を見)。)

男1 危なかつたですよおっもっ少しで轢かれるところでしたよおっはははは。さあ、どこに乗つたらいいですか？荷台ですか？

女1 ああ…。

客1 荷物が一杯なんじゃないですか？

男1 はあ？そんなまさか、こんなに大きなトラックなんですよう私人座るスペースくらいあるでしょう。

客3 あのお、

男1 はい？

客3 何を乗せてるんですか？

男1 あのお、何を乗せてるんですかと、この若者が。

女：（何やらメモを手取る。）

男1 この方はただの運送屋なんだ、中身が何かなんて知らないんだよ。だつてさうだろ、運送屋がいちいち中身を確認して運ぶ訳ないじゃないか。それでこそプロの仕事だよ。

客3 でもこんなに大きなトラックですから。

男1 そうですよねえ。あの、そんなにギョギョ詰めなんですか？

客5 はい！

男1 どうぞ。

客5 豚と牛、どつちが多く積めるかと言われれば、牛の方が積めます！

男1 それはなぜなぞですね。なんで今なぞなぞなのかわかりませんし、しかもあなた、答えまで言っちゃってますからおさら訳がわかりません。

客5 わかりました！

男1（女に）あのですね、その、奇跡的な話なんです、私達こんなに人が居て、誰も携帯電話を持ってないんです。なので助けを呼ぶ事も出来ないんです。あなたが、あなただけが頼りなんです。だからお願いします！もうほんのちよつとしたスペースで結構です、私だけでもどうにか！

男2 あ、

男1 君はダメだよ。君ほど信用できない人間は居ないんだ。

男2 お子さんがいるみたいですよ。

男1 え？

男2 フロントミラーに写真が飾ってあります。

男1 あ、ホントですね。うん、だからなんなんだ？

男2 女手一つで幼い子供を育てるなんて並大抵の事ではありません。

女 子供の写真を手に取る。

男1 なんだ君は、まるで女の全てを分かっているかのような発言しやがつて、君の魂胆は判ってるんだからな、そうやってこの方に取り入って自分だけ助けて貰おうとしてるんだろ、そうはさせるか。

男2 運送屋さんにとって納期に遅れるのが、一番の損失なんです。今こうして通せんぼをされては納期に間に合わない。そうなる信用を失ってしまいます。同時に仕事も失つて、子供を育てる事が出来なく

なつてしまつんです。

男1 君は何が言いたいんだ？

男2 この方が乗せたくないと言っている以上、このまま行かせてあげた方がいいと思うんです。

男1 せっかくのチャンスなんだぞ、良く言えるなぞうという事。君はいいんだよ！つ死んだつてき、私には、そつだよ、私にだつて家には妹が一人居るんだ。

男2 妹が？！

男1 何を驚いてるんだ、

男2 妹が？！

男1 いいじゃないか妹が居たつて、もう高校生になる。私達兄妹は幼くして両親を亡くしてしまつてね、今まで私が妹を育ててきたんだ。私が居なくなつてしまつと妹は一人ぼつちになつてしまつたよ（女に）だからお願いします！荷台を開けさせて下さい！

男1 頭を下げる。

客2（手を挙げて）はい。

男1 すみません、もうひと押しのところなんです。

客2 お幾つですか？

男1 私ですか？

客2 トラックの運転手さんです。

男1 バカですか、失礼じゃないですか初対面の方に歳を聞くのは、ただでさえ機嫌悪いんですから。

客2 …。

男1 あのお、失礼ですけど、お幾つですか？

女 …（時計を見る）。

男1 わかりました。（客2に）18です。

客2 18？！

男1 はい。

客2 18？！

男1 それがなんですか、これで気が済んだでしょう？

客5 はい！

男1 はい。

客5 18というのは嘘ですよ？

男1 当り前でしょう。ウィットに富んだユーモアだよ。

客5 わかりました。

男1 あなた歳聞いてどうするつもりだったんですか？

客2 凄く綺麗なので、お若いだろうと思ったんですけど、お子さんが居るといっているのでどうなのかなあと。そうですか、やっぱり18ですか。

男1 …は！

皆 女を見る。

女 …？

男1 おー、喜んでいらつしやるー君、グジグジですよ。さあ皆さん乗りましょう荷台に！

女 え、え…？！

客3 あの

男1 なんですか！

客3 18な訳ないじゃないですか、どう見ても。

男1 軽はずみな事言うんじゃないよ、君はいつもそやって口を滑らせて人を不快な気分させる。直したまえそういうの。

客3 だってそんなのただの褒め殺しじゃないですか、それこそ気分悪くさせるだけですよ。

男1 じゃあもうわかったよ、君は乗せない。

客3 え！？

男1 さ、皆さん乗りましょう！

客3 え、ちよつと！

女 あ…、

男1、荷台を開ける。

男1 …なんだこれは、空っぽじゃないか！

客3 僕も乗せて下さい！

男1 君はダメだよ、もうあの方が怒ってらつしやるから。

客3 あの人は何にも言っていないじゃないですか。

男1 後でちゃんと助けに来てあげますから。

客3 そんなの信用出来ません。ちよつと！

男1 ほらすぐそつという事言う。君の言う事はいちいち不快なんですよ。さ、さ、皆さん早く乗りましょう！

客3 そんな、ちょっと！

皆、荷台に乗り込む。

客3 僕も乗せて下さい！人でなし！

男1 うるさい！君が乗ったら我々も降ろされてしまうんですよ。

カシヤン！ 男1、荷台のドアを閉める。

男1 じゃあお願いします！

女 …あ、ああ。

ふうん 走り出すトラック。

客3 人でなしー！！

客3、置いて行かれてしまった。

場所がスクロールするように、客3の方が遠くへ消えていく。

トラックの荷台では、

男1 いやあ、助かりましたねえ。一人の犠牲で済んでホント良かったと思います私。

男2 会社には内緒にしておきましょうね。

男1 なんだだよ、君が事故った事はちゃんと報告するよ。

男2 じゃああなたが一人のツアー客を見捨てた事、私も報告しますよ。

男1 わかったよもう、じゃあお互い内緒にしておこうね。私はちょっと、安心したら眠くなってしまった。

男1、暖かさからか、目がトロンとしている。

客4 あの？

男1 はい、何か？

客4 荷物なんてどこにもありません

男1 ええ、空っぽでしたね。

客4 だったら私達を乗せるくらい訳ないと思うんですけど…。

男1 まあねえ。

客4 あの人は、意地悪な人です。

男1 まあ意地悪でも良かったじゃないですか、我々は助かったんですから。

客1 はい。

男1 何か？

客1 でも意地悪な人だと思います。

男1 うん、もうあんまりそういう事言わない方がイイですよ。降ろされてしまいますからね。さっきの人みたいにね。

女、地図を見ながら、必死に運転している。

客5 はい！

男1 なんですか？

客5 窓は無いのですか？

男1 窓は無いみたいですね。

男2 トラックの荷台にはたいてい窓はありませんね。

客5 わかりました。

男2、荷台の中をワロワロ歩いている。

男1 君もほら、何をワロワロしてるんだい、じっとしてなさい。

男2 これ、どこ走ってるんでしょ？

男1 どこだっつていいじゃないか、君が心配する事じゃない。

男2 変なところに連れて行かれないか、いいけど。

男1 君よくそういう事言えるよね。ねえ、わかってる？君のせいでこんな目に遭ったんだからね。

男2 しかもさっきからひどくノロノロ運転だ。

男1 安全運転と言いつつ。

男2 走っても追いつけるくらいスピードですよ。これはぎつと。

男1 あのね、本当に運転が上手な人は、逆にスピードを感じさせないものなんだよ。君以外の運転手の時はいつも思うね私は。  
客2 はい。

男1 どうぞ。

客2 私もそう思います。

男1 でしょうか？

客2 トラックの運転手というのはほとんどが男です。その中で対等に渡り合っているという事は、相当な技術があるのだと思います。が、それも私の言う事なので

男1 いやその通り！あなたの言う事は大抵当たってます。私の思うに、この運転手さんは、日本で一番速いトラック運転手なんだと思いますね。日本、速い女のトラック野郎、「日本、速いトラックメロウ」とはまさにこの人の事です。

男2 でもですね、

男1 もう止めてよ。私に話しかけないで。私はもう眠る寸前だという事くらい見たらわかるよね。ちょっと休憩しましょう！皆さん

カタカタカタ… 皆、揺れ出す。紙相撲のように。

男1 おお…？

客5 はい！

男1 はい。

客5 ひどく揺れます。

男1 はい、知ってます。私も体験してますから。

客5 これは、震度いくつですか？

男1 地震じゃありません。

客5 わかりました。

客4 あの

男1 どうぞ。

客4 こんなに揺れていたんでは上手く喋れません。

男1 そうですね、じゃあ黙っていきましょうか、舌噛みますからね。

客1 声まで揺れます。

男1 ええ、そうなんですよねえ。

客1 ワレワレハウチ、ヲジンダ。

男1 ああ、そうなんですか。私は地球人ですけどね。

客2 はい。

男1 どうぞ。

客2 ワタシモチキ 舌ジンダ。

男1 そうなんですか。

男2 これでも、日本、速いですか？

男1 速いよ、速すぎるくらいだよ。

カタカタカタカタ音、ここで止まる。

男1 あ、やつと揺れが収まった。

客5 あの！

男1 はい？

客5 おえー！（吐く）。

男1 わー！……き、君ねえ、

客5 気持ち悪いです。

男1 あーもお……。すいませーん。

男1、荷台の壁を叩く 「ドンドン、ドンドンー」

女 ……ん？

「キキー」 止まるトラック。

男1、荷台の扉を開け、降りてくる。

男1 あのお、すいません、ちょっと休憩してもいいですか？

女 ……あ、え？

男1 ちょっと一人、吐いてしまったので

女 え……？！

男1 荷物は、大丈夫そうなんですけどね…、荷物はね。

女、運転席を降りて荷台を確認する。

客達も降りてきて

客5 (女) 荷物なんかどこにも無いじゃないですか！と言ってきましたこの人が。

男1 ちよっと、私は何も言っていないじゃないですか。こいつですよ吐いたのは！

客4 あの人は、意地悪なんじゃないかとも言っていました。

男1 それはあなたでしょ！

客1 この人は宇宙人だそうです。

男1 それは君がふざけて言ったんだろ。

客2 我々は地球人なんですけど。

男1 コレ！みんな勝手に喋らない！なに急に喋り出してるんだよ。私のトラックメロウと勝手にコンタクト取らないでくれる？

男2 なんか凄く揺れましたよね。

男1 おい、なんでそんなにフレンドリーなんだ君は。道無き道を進んで下さってるんだよ。文句あるなら降りたまえ。

男2 この人が、あなたの事を日本 速いトラック運転手だと言っているのですが、それは本当ですか？

男1 バカ、何を言ってるんだ。明らかに日本 速いじゃないか。気安く喋りかけるんじゃないよ。

男2 日本 速いつて、どういう事ですか？

女、申し訳なきように、地図を開く。

男1 日本 速いつてどういう事って、そのまんまじゃないか。日本 速いんだから、日本 速いんだよ。でも実際日本 速い人は自分の事を日本 速いなんて言わないものだろう。あんまりトラックメロウ様を困らせるんじゃないよ。

女 うーん…

男2 どうもこの人は、自分の事を速いなんて思っていないようなんです。

男1 それはあれだよ。トラックメロウ様は自分で運転してるんだから、体感速度はそんなに速くないんだよ。でも周りで見ている人は速く見えるんだよ。

男2 はあ。

男1 という事はつまりアレだよ、相対性理論ですよ。

男2 おっ、難しい言葉が出てきましたよ。

客1 座りましょう。

客達、体操座りで男1を囲む

女、時計を見たりしている。

男1 つまりですね、えー、このトラックはですね、物凄い速さで走っているんです。そうするとですね、その、速い乗り物に乗っていると、時間がゆっくりになるんですな。

客2 それはつまり、未来に行けるといふ事ですか？

男1 そういう事ですね。

客4 え、このトラックはタイムマシンなんですか？！

男1 そういう事ですね。

男2 普通に、「ISUZU」と書いてありますけど。

男1 カモフラージュだよ。「ISUZU」の「I」はタイムマシンの「I」だよ。

客4 凄い！タイムマシンに乗ったんですね私達。

男1 ポイントはあの揺れです。

客4 え？

男1 あの揺れは、音速の壁を突破した時の、衝撃ですな。

客2 音速の壁？

客1 マツハですか？

男1 そう、マツハです。

男2 荷台で感じたスピードは、時速20キロくらいだったんですけど。

男1 それはマツハ20です。

客達 マツハ20？

男1 そうです、もう凄く速いんです。

客5 はい！

男1 どうぞ。

客5 マツハ文床という人を知っています。

男1 それは昔の女子プロレスラーですね。今の若い人だと知りません。

客5 わかりました。

客1 タイムマシンって、光の速度じゃないと出来ないんじゃないんですか？

男1 そうですね、だからマツハ20は、その途中ですね。

男2 スピードメーターは普通の奴みたいですが。

男1 もうそんなものはあってもなくても同じなんですな。スピードメーターも、マツハとか言われちゃったら、もう計るのもバカらしいって感じですよ。

客4 なるほど。

客1 しかし、そんな速度で走ったら、日本なんかあつという間に通り過ぎてしまっんじゃないんですか？

男1 まあね。

男2 ここはどこですか？

男1 外国ですかね。

客2 光の速度は、一秒間に地球を七周半するというのは本当ですか？

男1 私もそういう話は聞いたことがあります。

男2 という事はここはどこですか？

男1 外国ですかね。

客1 マツハ20と光の速度、どれくらい違うんですか？

男1 そういう難しい事はわかりません。

客4 マツハ20は時速になると何キロで、光の速度は時速何キロなんですか？

男1 あなた達マツハ20にこだわり過ぎです。もうマツハ20の事は忘れて下さい。私ももうマツハ20とか良くわかりませんから。

客5 そうか、私分りました！(立ちあがる)

男1 は？

客5 このトラックの荷台には、荷物なんて載ってないじゃないですか。しかし本当は、荷物が無い訳じゃないんです。

男1 はい？

客5 ここには、見えない荷物がたくさんあるんです。それは形にならない思いの詰まった荷物です。その中には、重いもの軽いものいろいろありますが、それぞれは同じ大切な思いの詰まった荷物なんです。例えばある時、青森に住んでいるおばあちゃんから、東京の孫にりんごを送りたいというので、この人が運送事になったとします。しかし指定された住所に行ってみると、そんな場所はどこにも存在しません。青森のおばあちゃんに電話をしてみると、そのおばあちゃんはお居ませんでした。つまり、この人がりんごを運送間に、外の世界はダンゲン進んで、この人だけがりんごを届けようと走っていたのです。いつしかりんごも腐ってしまつて、荷台にはもう何も乗ってはいないけれど、『おばあちゃんが孫にりんごを届けたい』、その思いだけは残っている。形は無いけれど、そうやって重い思いの荷物が幾つもあるんです。この人には、その荷物が手に取るように見えるんですよ。いつまでも、ここに。

男1 え？

客5 だから私達を乗せる事を躊躇したんですね。

男1 じゃあこの方は、そんなもう無くなつてしまつた荷物を、未だに運んでいるのですか？届ける先も分からないまま？

客5 荷物を届けるだけが運送屋の仕事じゃないんです。

客1 思いを届ける、それが運送屋の仕事…。

男1 皆さん聞きましたか！この方は、運送屋の鑑のような人ですよ。

客達、感心して女を見る。

女 へ…？

男1 はっー皆さん周りを見て下さい。そう言われてみると景色が、なんだか何年も未来のように感じませんか。

皆 キョロキョロと周りを見る。

男1 俺等は今、時空を超えたんだわ！

客2 ということはここは未来のあの場所なんですね！

男1 うん、そうかもしれないね。

客1 アスファルトももうありません。

男1 そりゃそうですよ、何年経ったと思ってるんですか。

男2 何年ですか？

男1 もうだいぶだよ。

客5 見て下さい、森は昔とほとんど変わらない様子です。

男1 そうです、森の木々は何千年と生き続けるんです。

客5 これがはるか昔から生き続けているという木ですか。

男1 森はそうやって地球を支えてくれているんですな。我々人間は自然に生かされているという事です。

客2 どこかにバスがあるかもしれない。

客1 しかしもつ錆ついてボロボロになっています。

男1 危ないですよ。もう人類は絶滅した後かもしれません。

客5 人類はどうなってしまったのでしょうか？

男1 皆さん、ここからは慎重に行動しましょう。

客4 いっどこから得体の知れない生物が襲ってくるかもわからない。

客1 添乗員さん私、凄い物を発見しました。

男1 お、いいよ。みんなだんだん自由に喋れるようになってきたじゃないですか。その調子ですよ。

男2 凄い物ってなんですか？

客1 あそこに居るのは、あの時の彼では？

男1と客達 え？

見ると、客3が息を切らして追いかけてきた。

客3 …良かった、追いついた。はあー。あ、もしかして待っていてくれたんですか？ありがとうございます！

客3 握手をする。

客5 冷たい…。

客3 あー、あったかい。

客5 びっくりするほど冷たいです。

客3 それはそうですよ、ずっと外に居たんですから。でも良かった。助かった。もうこんな冗談はやめて下さい。

男2 さて、これはどう説明しますか？

男1 うん、世の中にはこういう不思議な事もたくさん起こるんだ。タイムマシンを発見した我々には、もう何が起こっても不思議ではないがね。

客4 つまりこれも、一つの思いの形なのですね。

男1 そういう事ですね。

客4 過去の彼の思いが残っている姿、それが私達には見えている。

男1 ちょっと待って、ということはいつ…。

客4 あんまり見ない方が…。

客3 でも雪が止んだから良かったです。ちょっと寒くなりましたから。

客2 寒くないのは当たり前ですよ…。

客4 会話しない方が、彼の為ですから。

男1 そっだよ。もう見ちゃダメだよ。情を移すと寄ってくるよ。

客5 手が…、凄く冷たかったです。

男1 洗った方がいいね、塩水で。

客4 彼はまた、自分が白骨化している事に気づいていないです。

客1 白骨化？！

男1 そりゃ何年も経ってるんだから、そうでしょう。

男2 何年ですか？

男1 もうだいたいぶだね。

皆 客3を見る。

客3 何ですか？そんなにジロジロ見ないで下さいよ。

男1 はいみんな、知らんぷりして…。

客3 え、またそんな事言うんですか？お願いしますよ、乗せてって下さい。もう軽はずみな言動は慎みますから。ね？  
男1 さあみんな行きましょう、次の時代へ。  
客達 おー！

皆 荷台に乗り込もうとする。

客3 時代ってなんですか？

男1（女に）じゃあ、お願いします！

女 あ、ああ…、

女 運転席へ。

客3 ねえ、乗せてよ。同じツアーの頁じゃないですか。

客3、客1の腕を掴む。

客1 触るな！

客3 ……

客1 君はもう…、白骨化しているんだよ。

客3 …え？

男1 あーあ

客3 白骨…？

客1 白骨化している事に気づいていないのは、君だけなんだよ。

客3 …白骨化ってなんですか？

男1 ほらあ、いきなりそんな核心ついたらダメですよ。混乱するだけですから。もつと、オブラートに包んでいかないと。

客3 何ですか？どういふ事ですか？

客2 白骨ってどうか、骸骨だよ。

客3 骸骨？

男1 うん、あんま変わってないからさそれ。

客5 骸骨と白骨、どっ違うんですか？

男1 まめ骸骨でも白骨でもどっちでもいいじゃないですか、内緒にしてあげましょう。

客3 え、何言ってるの？

客1 お前だよ。お前はもう、骸骨なんだ。お前だけが、骸骨なんだ。

客3 …骸骨？

男1 うん、だからね、彼は今、自分を骸骨とは思っていないんだから、いいじゃないですかそれはもう。

客5 なんだか私の手が、骨臭いです。

男1 ほら、もつやばいよそれ。

客5 えー…！

客5、客2の服で手を拭く。

客2 え、ちよつとー骨が移る、骨が！

客2から逃げ惑う二同。

男1 (咳払いをして) えー皆さん、骨は移らないですからねー。骸骨に触られても、骸骨にはならないですから、慌てない。

客2、男1に触る。

男1 わ！ちよつとーナシナシ、俺はナシだつてばー！

男2 はい今、あの人が骨です。

男1 もおー！

男1、みんなを追いかける。

「あはは、あはは」と鬼ごっこを始める二同。

客3も 繙になつて笑いながら参加している。

客1 怖わー、骨、恐わあ。

客3 あははは、えーっん誰？誰が骨？

男1 (急に真顔で) お前だよ！

ムードが 変する。

客 3 …え？

男 1 お前以外誰が骨なんだてバーカ。

客 3 …ちよつと待つて下さい。なんで僕が骸骨なんですか？ねえ？どこが骸骨？…肉が見えますよ。服も着てる。それなのに、僕は骸骨なんですか？

男 1 …思い出なんだよ。

客 3 思い出？

男 1 君の思い出が、鮮明に蘇っているだけだ。

客 3 うん。

客 3 …思い出？

男 1 さあ皆行きましょう！

客 3 僕も乗せて下さい！

客 1 お前はダメだよ。

客 3 なんでも助けに来てくれたんじゃないの？僕は骸骨じゃないです。いたって普通の男です！

客 1 お前はもう骸骨なんだよ！

客 3 違います！認めません！

男 1 君が認めようが認めなからうが、君は骸骨なんだよ。

客 3 僕をちゃんと見て下さい！どこが骸骨なんですか？

男 2 まあ見た感じ白骨化はしてないよ。

客 3 でしょ？

男 1 あのな、見た感じ白骨化したら、俺達は初めからお前に喋りかけてないから。

客 3 …え、

男 1 最後にお別れの挨拶をして貰えるだけでも有難いと思えよ。じゃあさようなら、骸骨。

客 4 じゃあね、骸骨。

客 5 ガイコツ♥

客 3 …骸骨ってなんだよ。僕は骸骨じゃないよ！

客 1 骸骨！ガイコツ！

客 2 骨！骨！

客 1 バーカ！

客2 骨！

男1 おい、ただの悪口みたいになってるから。ヤメときなよその辺で。

男2 あの、

男1 なんだよ？

男2 過去へは行けないんですかね？

男1 …過去？

男2 タイムマシンだったら、過去へも行けるんじゃないですか？

男1 まあ、それは確かに、そうだけども…。

男2 トラックメロウ、どうですか？

女（地図を見ながら）…え？

男1 いや、しかしそれは…、

男2 なんですか？

男1 バックしなくちゃいけないんじゃないのか？

男2 ああ、そうですね、きつと。

男1 バックはダメだよ。バックはしないと行ってたじゃないかトラックメロウ様が。

男2 でも、過去へ行けるかもしれない。

男1 バックは嫌だと言ってるんだ。さ、行きましょー明るい未来へ。

男2 我々が事故を起こす前のこの道に、戻れませんか？そうしたら彼も、骸骨にならずに済むでしょ。

客3 …え？

男1 お前は…、なんだ？

男2 どうですか、トラックメロウ、出来ませんか？

女 …えー、

客4 あのお、

男1 はい。

客4 …残念ですけど、それは無理だと思います。

男2 どうして？

客4 私、ドラゴンボールを全巻読んだんです。

男1 なんですかいきなり？

客4 ドラゴンボールによると、世界はパラレルに存在しているそうなんです。だからたとえ過去に戻っても、骸骨になってしまった今の彼を元に戻すことは出来ないと思います。私達に出来るのは、過去に戻って

もう一人の彼を骸骨にならないように助けてあげる事だけ。二つの世界に、骸骨にならずに済んだ彼と、骸骨になってしまった彼、ふたつの骸骨が存在するだけなんです。

客3 …二つの骸骨ってなんですか？

男1 骸骨になっちゃった君は、骸骨のままか…。

客3 あなたが僕を置いてけぼりにした癖に…

男1 残念だが君は、骸骨のままだぞうだ。

客3 …僕は、骸骨？

男1 踊れ！骸骨なら踊れ！

客3 …お、踊る？

皆 手拍子をする。

皆 ほーね、ほーね、ほーね、ほーね。

客3 踊れるかよそんな手拍子で！

男1 君ね、踊らなかつたらもう一人の骸骨にならずに済んだ君も、助けてあげないからな。

客3 なんですかそれ…。

男1 (客達に) ねー？

客4 もう一人のあなたも骸骨決定ね。

男1 踊るんだよ、もうこうなったら踊るしかないだろ。もう一人の君を助けたくはないのか？

客3 …、(拳を握り締め) わかりました。踊ります。…だからせめて、もう一人の僕は助けてあげて下さい。僕が踊る事で、もう一人の僕が骸骨にならずに済むのなら、僕は骨が折れるまで踊ります。

男1 初めからそう言えば良かったんだ。全く骨が折れる奴め。(客達に) ねー？

客達 …。

男1 さあ、踊れ。

男2 もうイインじゃないですか。

男1 え？

客1 そうですね、もう充分です。

客3 …え？

男2 お願いします、トラックメモロ。

女 …？

男2 どうか、度だけバックして貰えませんか？

客1 私からもお願いします！

客2 いや私からもお願いします！

客4 私からも。

客5 私もお願ひします！

男1 皆さん…。

女 ……？

女 ギアを入れる。

び、び、び、バツ…ます。び、び、び、バツ…す… 途切れ途切れのアナウンス

男1 トラックメロウが、トラックメロウがバックして下さい…。良かったな、君のその思い、もう一人の君にきつと届けるよ！

客3 ……ありがとう。どうも、ありがとう。

客5 トラックメロウが運ぶのは、荷物だけじゃないのです。

男1 かっちょいい、なんちゅうかっちょいい台詞だ！

男1、涙を拭きながら荷台に乗り込む。

男1 さあみんな乗って、過去へタイムスリップしますよ！

客3以外、荷台に乗り込む。

客3 あ、あの！

男1 なんだ。

客3 どうか！あの時の僕によく言つといて下さい。人の反感を買うような事を軽はずみに言つたと。なんとなくの発言は命取りになると。いつも、感謝の気持ちを忘れずに！

男1 ……成仏しろよ、骸骨！ガイコツ！

客達 ほねー！

ぎい、ガチャン！ 男1、荷台のドアを閉めた。

客3、トラックに背を向けて

客3 ……泣くもんか。泣いたつて僕は骸骨。涙なんか出るもんか。

客3、元の来た方へ走りだす。

「おーん！」 女、不安そうに振り返り、バックで走り出す。

荷台では、皆涙を流している。

やがて、ガタガタガタガタ……

男1 さあ、タイムスリップしますよ！

また紙相撲のように皆揺れる。

途切れ途切れのアナウンスが、びび、バツま……。バツ……。す……。

ガタガタが止まると、

男1と客達 おえー！（吐く）。

男1 ……さ、着きましたよ。

皆、荷台から降りてくる。

バスの姿がある。

客1 ……元の道だ！

客2 バスがあります！

男1 ほんとですね、戻ってきましたね。

男2 ……。

男2、バスの周りをウロウロしながら、ポケットに手を入れる。

と携帯電話が出てきた。

客4 雪は、降る前なんでしょう？

男1 そうですね、まだ降ってませんね。

客2 バスには誰も乗ってません。

客5 どこに行ってしまったんでしょう私たちは。

男1 皆さん、あんまりウロウロしないで下さい。なにせ我々は初めて過去へタイムスリップしてきました、過去の自分に遭うとどうなるかわからない。

客4 そうですね、そういう危険はありますよ。

男1 おい君、バスに近付いちやダメだったら。

男2 事故を起す前だったら、エンジン掛かるんじゃないですか。

男1 おい、そつだそつだ。

客3、息を切らせて走つて来た。

客3 ちょっと皆さん！まだこんな所に居るんですか？もう早く行つて下さい！僕の気が変わらないうちに。

男1 何を言つてるんだ、君を迎えに来たんじゃないか。

客3 …え？

男1 いろいろ反省してね、我々も。

客1 同じツアーの仲間じゃないですか。行きましょう、一緒に。

客3 …え、いいんですか？僕も乗つても。

客2 イイも何も…、そうそう、もう一人の君が、君によろしくと言つていました。

客3 もう一人の、僕…？

客4 良かったですね、あなた思いのあなたが居て。

客5 あなたはあなたの事を凄く心配していました。

客3 …え、じゃあもしかして、もう…？

男1 君の思い、ちゃんと届けましたから。

客3 そうなんですか…、もう一人の僕も、僕の事を…。僕は…、僕のことなんか誰も思つていないと思つていました。そうか、僕が居たのか。僕がもう一人の僕を考えると同じように、もう一人の僕も僕の事を考えてくれた。

客1 …私もね、これからは私の事を考えると同じように、あなたの事を考えてみようと思ひます。

客2 私も、私の事を考えるのと同じように、あなたの事を考えます。

客4 私も、あなたの事を考えます。

客5 私も考えます。

客3 …ありがどう！僕も、その何倍もあなた達の事を考えて生きて行きます！みんなどうもありがどう！

男1 …うん、イイ仲間じゃないか。そつだよ、そつやつて皆が皆、自分の事のように相手の事も考えることが出来るようになったら、世界はもっと平和になるよ。それがわかっただけでも良かったよ。ね、良かったね。皆、さあ行こう！もう飛騨高山とかどうでもいいじゃないか。木彫りの熊なんてちつぽけな事言つてないで、ナマの熊でも探しに行こうよ、皆で、ね！

客達 はい！

女 …あ、あのお？

男1 あ、ありがとうございます。さいました。トラックメロウ。そしてありがとうございます。トラックメロウ。

男1と客達 頭を下げる。

女 あ…、え…？

男2、ペコリと頭を下げる。

女 あ…、ああ、じゃあ…。

ぶーん、ぶんぶーん 女、去って行った。

男1と客達 ありがとうございます。トラックメロウ！

力一杯手を振り、女の去った方を見送る客達と男1。

男2 …行っちゃった。

男2はバスの運転席に座っていて、エンジンを掛けてみる。

ギユルキユルキユルキユルキユル、キユルキユルキユルキユル

男1 さあ行こう！熊を探しに！

客達 おー！

男1と客達 「くま、くま」と言いながら、行進していく。

男2 バカだなあ、あの人達

男2、空を見上げて深くため息を吐いた。

また雪が降って来たのだ。

終

【配役】

男1／添乗員 ……中尾達也  
男2／バスの運転手 ……古川聖二／平塚直隆  
客1／ポロシャツのおじさん ……田内康介  
客2／メガネを掛けた背広姿の細長い男 ……伊藤寛隆／高瀬英竹  
客3／大学生くらいの青年 ……三浦史敬／二瓶翔輔  
客4／ぼつちやり体型の主婦 ……河村梓  
客5／「見中学生男子のよつに見える女」 ……角マリナ（劇団アルクシアター）／空沢しんか（フリー）  
女／トラックの運転手 ……山田マキオ

【上演記録】 2012年8月3日～5日 東京公演 座 高田寺1 夏の劇場09 日本劇作家協会プログラム

8月31日～9月1日 長久手公演 長久手市文化の家 森のホール 長久手地域演劇祭

演出 舞台美術／平塚直隆 照明／花植厚美 音響／田内康介 吉田愛 舞台監督／柴田頼克

この戯曲の著作権は、作者である平塚直隆にのみ帰属するものです。  
上演許可あるいはその他のお問い合わせは、作者の所属する「オイスターズ」へどうぞ。

■ オイスターズ ■

ホームページ

[http://www.geocities.jp/theatrical\\_unit\\_oysters/](http://www.geocities.jp/theatrical_unit_oysters/)

メールアドレス

[theatrical\\_unit\\_oysters@yahoo.co.jp](mailto:theatrical_unit_oysters@yahoo.co.jp)